

Good の 意 味

山 田 伸 明*

The Meaning of 'Good'

Nobuaki Yamada*

1. はじめに

本論文では, good が生起する発話に生じる commendation という発話行為らしきものが, good の基本的な意味要素を構成しているか否かという点, 並びに, good の意義素がどのようなものであり, その意義素がどのような特徴を示すかという点を, 限定的 (attributive) 用法と叙述的 (predicative) 用法に分け分析したい。また, 限定的用法の場合, Weinreich (1980) が提案している, 意義素性の転位という現象が起き, この為叙述的用法とは異なった解釈をされることになるという点も論じたい。

2. 発話行為と good

Hare (1970: 5) では, (1)の様な文を例に挙げ, 肯定で, 断言的 (categorical) である, 叙実法の文では, good という語は commendation という発話行為を行なうとしている。

(1) That is a good book.

さらに, Hare (1970) では, この発話行為が good のすべての意味ではないとしても, good という語の意味の重要な要素であるとしている。

本章では, commendation という発話行為が, はたして本当に good という語の基本的な意味要素かという点を, 諸学者の論を参考にし, 検討してみたい。

2.1. 発話の三層性

以下の引用からも窺える様に, Hare の言う tropic (mood の記号) に good の commendation を行なうという特性を, はっきりと位置付けているわけではないが, commendation という発話行為を行なう能力を持つ特性が, assertion という特性以外に tropic の位置に現われると Hare は考えている様である。

*外国語系列 (Department of Liberal Arts and Sciences—Foreign Languages)

It would be a gross oversimplification to say that the word “good” is itself a tropic or mood sign. When a performer says that it is a word used for commending, he means that, in its analysis, which is undoubtedly complex, other tropics besides that of assertion will appear.

(Hare, 1970 : 24)

本論に入る前に, phrastic は命題内容, tropic は mood を示す能力を持つ潜在的な意味要素であり, neustic は潜在的な mood の力を発話場面において引き出す引き金的な役割をはたすものであると筆者なりに定義しておこう。この定義に従えば, Lyons (1977) に於いて述べられている様に, 上記の意味構造が言語行為に属するもの, すなわち, 文の構造ではなく発話 (utterance) の構造であるとしても, neustic 以外の tropic, phrastic は, 毛利 (1981 : 67) に於いても述べられている様に, すべての発話された文に生ずる意味構造と言えるであろう。言い換えれば, すべての文法文が持っている意味要素であると言えよう。さらに別の言い方をするならば, phrastic と tropic は, 文の意味構造の核であると言って良いであろう。Hare の意味の三層構造を基にして, 論を進めている Forrester (1982 : 55) に於いても, 文の意味構造は phrastic と tropic という部分からなり, neustic は phrastic と tropic からなる文を実際に発話する場合の発話の力 (illocutionary force) であると定義されている点からも, phrastic と tropic とが文の意味構造の核を構成するものであると言えよう。*

さて, Hare の言う様に, tropic に commendation という発話行為を生じさせる何らかの意味要素が有るとするならば, good を主節内に含むすべての肯定で, 断言的な叙実文が発話された場合に, commendation という発話行為が行なわれなければならないことになるであろうが, はたしてそうであろうか。

2.2. 反例

発話行為理論から good を含む文には commendation という発話の力があるわけではないという議論が Searle (1969 : 141-6) に於いて行なわれているが, 彼のように発話内行為の定義を細かく論じなくても, 肯定の断言的な叙実文でも必ずしもその様な発話行為が行なわれているとは考え得ない様な文を容易に見出せる。以下(2)~(5)がその例である。

(2) He gave him a good hiding. (Urmson, 1979 : 169)

(3) George had a good nap. (Ziff, 1960 : 233)

(4) It is a good two miles off. (ibid., 247)

(5) He played a good hour on the cello. (ibid.)

上記の文では commendation という発話行為が行なわれているとはとうてい考えられない。(2)~(5)の文に生起している good は, 普通の用法とは異なった, 強調的意味を持つ周辺的な用法で

*Forrester (1982 : 55) に於ては, 実際の発話の力と neustic を同一視している様であるが, 筆者は同意できない。発話の力というものは tropic が適当な neustic と組合った時に生じる力であり, neustic と同一であるとは言えないからである。Hare (1970) Lyons (1977 : 750) 参照。

あると言われるかもしれない。しかし、普通の good の用例でも(6)は commendation とか承認を与えていることにはならない。

(6) He's good outside (but bad inside.) (Doi, 1973 : 40)

(6)に対しては、以下の様な説明が与えられていることからわかる様に、むしろほめたり、承認しているのではなく、承認できないという気持を表わしている。

To say of someone, for instance, that "he's good outside but bad inside" is a rather disapproving expression signifying that the person in question is selfish and difficult in dealing with family members, yet in his "outer" relationships passes for a pleasant and considerate man. (ibid.)

さらに、It is good for a first novel. という文にしても、Vendler (1963 : 460) によれば、一定の規準で評価しているとしても、軽蔑的な含み (derogatory connotation) を持つ文であるということだから、ほめているとはとうてい考えられない文である。

以上の点から、promise 等の発話の力を無くす、条件節、疑問文、等の文脈以外でも、ほめたり、承認したりしていない文が普通の肯定文内で見られるということは、commendation あるいは、それに似た機能をはたす意味要素が tropic の部分に存在するとは言い得無いという証拠になると思う。況してや、あらゆる肯定で断言的な文で good が commendation という発話行為を行なうとは言えないと思う。

さらに付言すべき点は、good は old とか long と同様に(7)の様な文脈では old とか long の本来の意味ではなく、long なら「長さ」old なら「年令」という様な意味になるが、good も「良い」という意味が無くなり、「良し悪し」を問題にするだけと取れる点である。すなわち、いわゆる無標の形容詞と同じ特徴を示す点である。

(7) How good is it? (Lyons, 1977 : 275)

Lyons (1977 : 275) はこの特徴を以下の様に説明している。

'How good is it?' can be used without any presupposition or implication that the referent of 'it' is good rather than bad; but 'How bad is it?' carries with it the presupposition that the referent of 'it' is bad rather than good...

上述の事実は、good を発話行為の面からではなく、他の形容詞と同様、形容詞という範疇内で、その意味特性を分析したほうが賢明ではないかという事を示唆している様に思える。

2.3. 発話構造内での位置付け

2.2で述べた様な事実が在るにもかかわらず、good という語を含む文が commendation という発話の力を帯びて良く使用されるということも事実である。そこで、commendation という発話の力がどうして出て来るかという点を発話の構造と関係付けながら検討してみたい。

Forrester (1982 : 94) では、先に述べた様に、彼の枠組では、文の基本的意味は、命題内容と mood から成るので、commendation というものを発話の力の一種であると認めながらも、文内での基本的意味要素では無く、発話時の意味であるとして以下の様に述べている。

... the illocutionary force — i.e., the speech act performed by uttering a sentence — is not part of the meaning of that sentence. Thus that we use “X is good” to approve or commend X is not a part of the meaning of that sentence.

さらに, Forrester (1982 : 123) に於いては, X is good 等の文は真偽値判断のできる叙実文 (indicative sentence) にすぎないと述べられている。

しかし, Forrester (1982) は, Hare (1970) の意味構造の三層性理論を基礎にしてはいるが, 忠実に Hare の定義に従っているとは思えないので, より Hare の三層性の理論を忠実に守っていると思われる Lyons (1977) の枠組を使い commendation という発話行為相当のものが出てくる理由を検討してみよう。

Lyons (1977) では, good を含む文と同様倫理学等で良く論じられている(8)は deontic statement であるとしている。

(8) It's wrong to tell lies. (Lyons, 1977 : 828)

また, deontic modality も p.833では, 命題内要素 phrastic に位置付けるべきものとし, 例えば, (9)は(10)の様な発話構造を持つと考えている。

(9) You must open the door.

(10) I say so—it is so—that! P exists (Lyons, 1977 : 839-40)

そして, (10)の様な分析が(8)(9)の様な, 彼の言う, deontic statement を分析するのに適当な分析方法であると考えているという点は以下の引用からも窺い得る。

... this is the kind of interpretation that we require for most present tense sentences when they are used to make deontic statements. (Lyons, 1977 : 834)

以上の Lyons の論が正しく, 且つ, wrong が good と, 評価を与えるという点で, 共通の意味特性を持っていると考えるならば, (1)=(11)は(12)の様に分析することが可能であると言える。

(11) That is a good movie.

(12) I say so—it is so—that being a good movie.

すると, good は, 命題内, すなわち, phrastic に位置付けるべきであるということになる。従って次章では命題内要素として good の意味特性を分析することにする。

では, commendation という発話行為に相当するものがどうして出てくるのであろう。それは, 以下の様に考えれば良いであろう。I say so—it is so という部分が結合すると, 一般的に, assertion という発話の力が出てくる。そして, 命題内容に good という要素が含まれているので good であるということを主張していることになる。従って good が用いられる時に出てくるいわゆる発話の力は, neustic と tropic の相互作用によって出てくる一般的な発話の力ではなく, 主張 (assertion) の一種であり, 普通の発話の力とは異なるのである。

簡単に言えば, 命題内要素が, neustic と tropic の力に影響されて出てくる随伴的な発話行為相当物, 言い替えれば, 本物ではなく, 適当な文脈において招かれた発話の力である。例文(6)の様な, commendation をしているとは取れない文が在ること, Ziff (1960 : 233) で述べられてい

る様に例文(13)(14)が承認を与えているとは取れないということからも、筆者の論点が正しいのではないかと思う。

(13) That is a good painting but I don't like it.

(14) That is a good movie but I don't like it.

2.4. 日本語との対照

概念内容の切り方、文法構造の相違、good と「良い」「いい」との意味範囲の相違が有るから、同列には日・英語の構造を比較対照はできないかもしれないが、間接的に筆者の論を支持する点が在ると思われるので、日本語の場合を少し考えてみよう。

(15)を例として考えて見よう。「その映画はいい 好」までが命題内容であり、「です」と「よ」とが、それぞれ、断定と相手に念をおす表現であり neustic と tropic とに関係している modality 表現であると考え得る。

(15) その映画はいい 好ですよ。

この様に、終助詞や助動詞で tropic や neustic に相当する部分を具現化することが多い日本語では「いい」がはっきり命題内要素であるということを示す。Good は、「いい」「良い」と同じ意味で使える場合がかなり有るので、日本語のこのような特徴は、英語の good も命題内要素であるということを裏付ける間接的な証拠になるのではなかろうか。

3. Good の意味

第2章での検討から、good は命題内要素に位置付けるべきであるということが明らかになった。それでは good はどのような意味特性を持っていると言ったら良いであろうか。この点を Katz (1966) 等を参考にして検討して行きたい。

3.1. Katz (1966)

Katz (1966 : 296) によれば、good は、統語標識以外に、意味標識 (+) を持っているとしている。一方、二種類の名詞のうち、knife, meat, watch 等は評価的意味標識を持ち、この標識を持つ名詞と good が共起すると、評価的意味標識に + という good の標識が移った様な読みになるとしている。例えば、 (M_i) が名詞の評価的意味標識であるとするならば、左辺から右辺の様な読みが生ずるということである。

$$(M_1), (M_2), \dots, (M_i), \dots, (M_k), (+) \langle SR \rangle \rightarrow$$

$$(M_1), (M_2), \dots, (+M_i), \dots, (M_k) \langle SR \rangle \quad (\text{Katz, 1966 : 312})$$

さらに、この good の持つ意味標識は、評価的意味標識に作用するものであり、自立的特性を持つことの無い共範疇的 (syncategorematic) な特性を持つものでしかないということである。

なお、liquid, grain of sand 等の評価的意味標識を持たない名詞は、Katz (1966 : 303) によれば、for, to, as, because 等の要素によって、評価すべき理由、あるいは、規準が設定された場合に、その名詞に、新たに評価的意味標識が付け加えられたりしている。

以上, Katz (1966) の論点を簡単にまとめた。この論は非常にすっきりとしていて魅力的ではあるが、問題点は無いであろうか。

3.2. Katz (1966) の問題点

Katz (1966) の枠組に関しては, Miller and Johnson-Laird (1976: 230) の様に, ある程度評価する記述も見られるが, かなり変形文法初期の枠組に基づいているので, いくぶん問題点が在る様に思われる。

まず, 第一に, Katz (1966: 291) に於いては, Article-Noun-is-Adjective, Article-Noun-(who, which)-is-Adjective, 並びに, Article-Adjective-Noun という構文を同じ意味内容を持つものとして記述している点が問題である。初期の変形文法では, 第二番目の構文, (あるいは, 間接的には第一番目の構文) と, 第三番目の構文が, 変形によって関係付けられていたが, 安井他 (1976: 169) に於いても指摘されている様に, この関係付けは, 必ずしも正当なものではないということが論議される様になって来ている。最も大きな問題点は, 限定的用法にのみ, あるいは, 叙述的用法にのみ使われる形容詞が存在するのみならず, 安井他(1976: 167-70), 毛利(1983: 184-5) 等で指摘されている様に, 指示対象修飾と指示法修飾*とでは意味が異なってくるという点である。

例えば, (16) の a, b では, 限定用法である (16a) は John の水泳能力を問題にし, 水泳がうまいという解釈, すなわち, 指示法修飾が一般的であるが, 叙述的用法である (16b) は, その swimmer が善良であるという解釈, すなわち, 指示対象修飾が, 一般的な読みであるということが, 多くの書物で指摘されている様に, 言えるのである。

(16) a. John is a good swimmer. (毛利1983: 184)

b. The swimmer is good. (ibid.)

第二に, 評価の意味標識を立てる事にも問題が有ると思う。機能が比較的是っきりしている, knife, watch 等の名詞は評価の意味標識を立てやすいであろうが, Katz (1966: 292) に於いて, 彼が評価の意味標識を持っているとしている mother にしてもどんな評価の意味標識を持っていると言えるのであろうか。況してや, 良く評価の対象になる man 等に至っては, どんな評価の意味標識を設定できるであろうか。倫理学者がいくら議論しても意見の一致を見ないであろう。尚, 評価の意味標識に対する批判は, Ginsberg (1966) に於いても為されている。

第三に(17)(18)の様な, 節を主語の位置に取る文を記述の対象から外した点も問題が有ると思う。

(17) That he came on time is good. (Katz, 1966: 289-90)

(18) What we heard about her is good. (ibid.)

3.3. Good の意義

叙述的用法と限定的用法共通に good という語が持っていると思われる意味標識は何であろう。

*毛利 (1983: 184-5) の用語を使用

3.2で述べた様に名詞自体が評価的意味標識を持つと考えるのは問題が有る。^{*} good や bad 等が評価を与える形容詞である以上、評価的意味標識に似た標識は形容詞自体が持っていると考えた方がよい。そこで、good という形容詞自体が+evaluative という意味標識を持つと仮定することにしよう。この標識は good, bad, right, wrong 等が評価を与える形容詞であるということを示すものであり、bad や wrong も+evaluative という標識を持つと考える。この点が bad を -evaluative であるとしている安藤 (1983), Katz (1966) とは異なる。筆者の設定したこの標識は、あらゆる評価を与える形容詞が持っているものと考え、すべての評価を与える機能を持った形容詞が+evaluative という標識を持つとするのである。

この標識の役割は次のセクションで述べることにするが、では good と bad を区別するにはどうしたら良いであろうか。そこで、この両者を区別するために、±above a certain standard という標識をさらに設定することにする。

これは、何も一般的に「良い」、「悪い」という意味を区別する標識ではなく、ある規準、あるいは、程度を越えているということ、あるいはその逆であるということの意味するものである。このような意味で標識を設定しないと、安藤 (1983: 284) の(19)の例、さらには良さというよりは厳しさを good と言う語が表わしているという Urmson (1979: 16) の(20)の例が説明できなくなるからである。

(19) a. a good deal of butter

b. a good supply

(20) He gave him a good hiding.

安藤 (1983) を参考にして考えると、これらの例は、すべて量という面で規準を越えているということになるであろう。(20)でさえ、「打つ」量が規準を越えているということになるであろう。

以上の点から good は+evaluative, ±above a certain standard という二つの意味標識を持つものとして論を進めたい。

3.4. 文内での意味解釈

3.2で述べた様に、限定的用法と叙述的用法とでは異なった特徴を示すので、両者別々に、3.3で述べた good の二つの意味標識、特に+evaluative という標識がどのような特徴を文内で示すかという点を記述したい。

まず、限定的用法から検討しよう。限定的用法の場合、good が名詞と共に起ると、Weinreich (1980: 140) で論じられている様に、標識の転位が起き+evaluative という標識が名詞に移ると仮定しよう。こう仮定する利点は後述することにして、最初に、その標識の転位がどのような様にして起きるかを見て行こう。

Weinreich (1980) の枠組を参考にしてその過程を説明すると以下の様になるであろう。

^{*}勿論、Katz (1966: 302) の bonanza, dry hole 等は、その語自体評価的意味標識を持っていると言えるであろうが。

good (a, <w>) : N (c, d) → (a → c, d, w) → (a, c, d, w)

すなわち, a = +above a certain standard, w = +evaluative であるとし, 名詞の元来の標識が c, d であるとするならば, 一番左の要素が結合した場合に, 二番目の様な形の転位が起き, それがどの様にして合成されるかは別としても, 三番目の様な標識の組合せになると考えるのである。

この枠組は Katz (1966) より以下の点で利点があると言える。第一に, ②1) a, b の様な場合, knife の何らかの機能に関して評価を与えているわけではないから, Katz (1966) の様に knife という名詞が最初から評価的意味標識を持っているとは筆者は言えないと思う。しかし標識の転位であるとすれば, knife という名詞に, あらかじめ, 評価的意味標識が在るわけではないから, 評価的意味標識を名詞内に設定して行く必要はなく, より言語事実に合った記述が可能になると言える点である。

②1) a. This is a knife.

b. Please take the knife.

第二に, 3.2でも少しふれたが, Dixon (1982 : 34) によれば, a good man は, a good loyal man, a good honest man, a man who works well 等という様に, 状況によって意味が異なるということだから, 評価的意味標識を名詞内にあらかじめ設定して行くのは不可能に近いと思うが, 形容詞の標識の転位と考えればその様な設定の困難さは無くなるという点である。

さて, あくまで仮定上の論だが, Vendler (1963) と筆者の集めた資料を参考にして +evaluative という標識が, 他の標識等と結合して, どの様に good の読みが成立するかを検討してみよう。

Vendler (1963 : 461) からヒントを得たのだが, +evaluative という標識は, 行為, あるいは状態を表す標識に働かけ, ある人, あるいは, 物の行為, 状態を評価するようにという事を指示する特性を持つ様に思われる。例えば, a good dancer という表現が有るとすると, dancer の持ついくつかの意味標識の一つと考えられる X dances という標識に +evaluative が結び付き, その動作・行為を評価するよう, 指示していると考えて良いだろう。同様に, a good cook ならば, +evaluative という標識が X cooks Y という標識に働かけ, その行為の良し悪しを評価するよう指示していると言えよう。②2, ②3の下線部も, +evaluative という標識が, それぞれ, behavior の意味標識 X behaves..., advice の行為を表わす X advises Y という標識に働かけ, 評価をするように求めていると言えよう。

②2) Since we are dealing with war and army, no matter how they advocate good behavior as their motto, it must be within the requirements of over-all strategy, and good behavior must meet their need*. (Kaiko, 1972 : 177)

②3) They say that if you don't want to lose friends, don't talk about politics. It's good advice. (ibid., 171)

*下線部筆者。以下同様。

尚、以下(24)(25)の場合は、それぞれ health, teeth の状態を +evaluative という標識により、評価するよう求めていると言えよう。

(24) Whenever I was in the city, I had to check whether he was still in good health. (Kaiko, 1972 : 5)

(25) At the same time a sharp pain like biting down on ice with a bad tooth pierced my left shoulder. (Abe, 1974 : 37)

従って、以上の検討から言えることは、動作、状態という様に、動詞的特性を持った標識に +evaluative という標識が結び付くように思われる場合が有るということである。この様な +evaluative の一特性を動詞的標識評価と命名する。この特性は、一般的に、人間は人あるいは事物の動作、状態を評価したがるという性質に対応していると言えよう。

一方、動詞的標識評価以外、最も顕著に見られるのが機能的標識評価と命名し得るものであろう。例えば、a knife ならば an instrument for cutting, a pen ならば an instrument for writing という、その名詞の機能を示す意味標識に、good の持つ +evaluative という標識が作用した場合、道具としての機能性を評価するよう指示を与えると考えられる。以下(26)の例も、food が something for eating という標識を持つとするならば、これに +evaluative がかかり、その機能をはたすか否かの判断をするようにし向けていると言えよう。

(26) It's a fact that dirty eating places in the back streets very frequently tend to have good food. (Kaiko, 1972 : 65)

(27)も医者の研究用という機能的な意味標識を cadaver が持つから容認可能であると Ziff はしている。

(27) That is a good cadaver. (Ziff, 1960 : 217)

一般的に言えば、人間はある事物の機能(用途等も含めた意味で)の良し悪しを評価する傾向があるから、機能を表す意味標識に +evaluative が作用しがちであるということであろう。

筆者は +evaluative という標識が結合し易いのは、上記二つの場合であると思うが、それでは名詞に結びつく適当な標識が有るとは考えられない(28)(29)の様な場合は、どう分析したら良いであろうか。

(28) That is a good dewdrop. (Ziff, 1960 : 217)

(29) He has a good complexion primarily to enable you to recognize him. (Urmson, 1979 : 165)

(28)の例は、Ziff によれば dewdrop が写真の被写体であるという場面が想定できれば、読みが可能であるということである。従って、場面から機能・用途が設定されていると考えて良いであろう。(29)も to 以下によってこの場合の顔の機能が明らかにされているから解釈が可能になっていると言える。それ故、場面の文脈・文内の他の要素によって機能設定が可能とされている場合は、+evaluative がかかる本来存在する意味標識が無くても評価ができることになる。

ここで限定的用法として用いられている good の +evaluative という標識の特性をまとめると

以下の様になるであろう。限定的用法に用いられている good の +evaluative という標識は、主に、動作（行為）・状態、あるいは、機能を表わす意味標識に作用する。そういう標識が無い場合は、場面、文脈によって作りだされた機能を表わす要因、言い換えれば、派生的文脈依存意味標識に評価を与えるよう求めると言えよう。この段階に於いても、尚、かかり得る標識が見つからない場合は、指示物自身に評価を与えるよう +evaluative という標識が指示するのではないであろうか。以上まとめてきた点は、限定的用法の場合、指示法修飾が一般的で、指示物修飾は例外的であるという定説とも対応すると思う。

さて、叙述的用法の場合に移ろう。安井他（1976：97）によれば、叙述的用法は主語の一時的状態を記述するのが最も一般的であるということである。good の場合は、一時的状態を記述するとは、(30)(31)だけを見ても言えないと思うが、主語の状態について記述をするだけだから主語の名詞に普通は +evaluative という標識の転位が生じないと考えられる。従って、+evaluative、+above a certain standard という両標識は、主語の状態について、ある事柄等が、ある規準以上であるということを記述するだけということになる。すると当然、安井他（1976：168）で記述されている様に(30)は善良なコックであるという読み、(31)は善良な先生であるという読みが優先するということになる。すなわち、いわゆる指示物修飾が優先する。

(30) The cook is good.

(31) The teacher is good. (安井他, 1976：168)

さらに、名詞節を主語に取る(32)も同様な説明ができる。(32)では雨が降っている事が何らかの規準で良いということが記述されているのである。

(32) It is good that it is raining.

また、Katz（1966）が記述の対象から外した(17)(18)も、(32)と同様な記述ができると思う。尚、Vendler（1963：458）の挙げている、(33a) の様な文も、彼自身も述べている様に (33b) と書換関係にあるから、主語の名詞句の特性を記述しているだけの文と考えて良いであろう*。

(33) a. John is good to help his brother.

b. It is good of John to help his brother.

以上の様に、筆者の記述法は、Katz（1966）より広い範囲の構文が記述できる点、並びに、標識の行動の相違によって、叙述的用法の場合、指示物修飾読みが優先するということが説明できる点が長所と言えよう。

尚、安井他（1976：168）では(30)(31)は、指示法修飾読みになることも、場合に依ってはあっているとしているが、これは場面的要因、並びに、限定的用法と叙述的用法が変形で関係付けられないとしても、かなりの場合に同じ様な意味であると考えられる為、日常的には、招かれた推論（invited inference）が行なわれ派生的に指示法修飾読みをするという理由が在ると思われる。

*但し、(33)の場合は状態を記述しているというより、行為に関して記述をしていると言った方が良い。こうした理由は今後の検討課題とするが、It is...of...to の構文の特性から来ているとも推測できる。

さて、本セクションの結論に移ろう。限定的用法には標識の転位が起き、他の適当な意味標識と結びつきその標識に関して評価するよう仕向けるが、叙述的用法には、それが起きず主語の状態を記述するだけであるとした。この記述法は一見煩雑に見えるが、指示法修飾読みと指示物修飾読みの相違を意味解釈手順の相違という点から説明できるという点、並びに、叙述的用法では記述できる構文の種類が多くなるという点で、Katz (1966) の記述より一歩前進であると言える。尚、ad hoc な評価的意味標識を名詞内に設定しておく必要が無いという点も利点であると言える。

4. おわりに

本論文では、命題外の発話の力として good の意味を位置付けるのではなく、命題内要素としてその意味を位置付けるべきであるという事を、いわゆる発話の三層構造理論を利用し説明した。さらに後半では、命題内要素として good は +evaluative, +above a certain standard という標識を叙述的用法の場合も限定的用法の場合も持つということ、並びに、限定的用法のみ +evaluative という標識の転位という現象が起きるということを説明した。この転位の有無が指示法修飾読みと指示物修飾読みの相違の原因であるという点も説明できたと思う。

尚、今後の課題としては、good と、その比較級である better との対比を行なう必要が有ると思う。例えば、good と bad は antonymy の関係として Lyons (1977) では位置付けられているが、better と worse は X is better than Y ならば Y is worse X という関係が成立する converse-ness 関係として位置付けられているのである。この点からも両者の細かい分析が必要であろうが、比較級の方がはるかに、原級より評価対照の規準が低くなるという点を示す日本文とその英訳文を示すだけにし、本論を閉じたい。

... I think it would be better than have you sulk in a corner of the room. Having you sulk when I know why is better than getting irritated without knowing a thing. Tell me.

(Kaiko, 1972 : 171)

(あなたにすみっこでふくれていられるよりましだわ。知らないでイライラするよりは知ったうえでそうなるほうがまだしもってところがあるわ。お話して。) <開高, 1972 : 184>

参 考 文 献

- 安藤貞雄 1983. 英語教師の文法研究 大修館書店
 Ballmer, Th. and W. Brennenstuhl. 1981. Speech Act Classification. Springer-Verlag.
 Bolinger, D. 1972. Degree Words. Mouton.
 Doi, T. 1973. The Anatomy of Dependence. Kodansha. (translated by J. Bester).
 Dixon, R. M. W. 1981. Where Have all the Adjectives Gone? Mouton.
 Forrester, M. G. 1982. Moral Language. The University of Wisconsin Press.
 Ginsberg, M. Comments and Criticism: Katz on Semantic Theory and 'Good'. *In: Journal of Philos-*

- ophy LXIII. No. 18 (1966) pp.517-21.
- Hare, R. M. 1952. *The Language of Morals*. Oxford University Press.
- _____. 1970. *Meaning and Speech Act*. In: *Philosophical Review* 79:3-24.
- Katz, J. J. 1966. *The Philosophy of Language*. Harper & Row.
- J. J. カッツ著, 沢田允茂監修, 西山佑司訳 1970. *言語と哲学* 大修館書店
- Lyons, J. 1977. *Semantics I, II*. Cambridge University Press.
- Miller, G. A. and P. N. Johnson-Laird. 1976. *Language and Perception*. The Belknap Press.
- 毛利可信 1980. *英語の語用論* 大修館書店
- _____. 1983. *橋渡し英文法* 大修館書店
- Searle, J. R. 1969. *Speech Acts*. Cambridge University Press.
- Urmson, J. O. 1979. *On Grading*. In: *Logic and Language* (ed.) by A. G. N. Flew, pp.159-89.
- Vendler, Z. 1963. *The Grammar of Goodness*. In: *Philosophical Review* 72:446-65.
- Weinreich, U. 1980. *On Semantics*. University of Pennsylvania Press.
- 矢島羊吉 1968. *新版倫理学の根本問題* 福村出版
- 安井稔, 他 1976. *現代の英文法 7. 形容詞* 研究社出版
- Ziff, P. 1960. *Semantic Analysis*. Cornell University Press.

例 文 引 用 書 目

- Abe, K. (translated by E. D. Saunders). 1974. *The Box Man*. Charles E. Tuttle Company.
- 安部公房 1973. *箱男* 新潮社
- Kaiko, T. (translated by C. S. Seigle). 1972. *Darkness in Summer*, Charles E. Tuttle Company.
- 開高健 1972. *夏の闇* 新潮社